

「異星人伝説 20世紀を創ったハンガリー人」

マルクス・ジョルジュ(著)

盛田常夫(訳)

日本評論社 2001年12月15日刊

文部科学省はわが国の研究水準を国際レベルに引き上げるためにトップ30校構想を打ち出し、ノーベル賞受賞者を大量に輩出できるような環境作りを進めることを公言している。わが国の多くの識者はこのような政策には否定的である。いわく、ノーベル賞をとるために研究を進めるものではないし、研究費や研究環境を整えるだけでは独創的な発想は生まれてこないということである。それは正論であるとしても、我々が受け入れなければならないのは、人間のあつ種の優位性は、地理的、時代的、人種的に偏在するという事実である。具体的な例を挙げれば、オリンピック陸上100メートル走の決勝にはいくつかの国の代表が残っているように見えるが、見方を変えれば、ほとんど西アフリカにルーツを持つ人達である。同じく陸上長距離では、東アフリカの高地の出身者が上位を占めている。学問に目を移せば、ノーベル賞受賞者はアメリカやイギリスが多く受賞を送り出しているが、別の見方をすれば、その大半が東欧にルーツを持つユダヤ人達なのである。

本書は学問、とりわけ科学の分野で、イタリア・ルネッサンス以来の天才の量産が19世紀末から20世紀初頭にかけてハンガリーの首都ブダペストを中心に起こったということを示し、また、その理由を解明しようとした極めて興味深い報告書である。

その中には、20世紀最高の頭脳を持ち主であったと誰もが認めるジョン・ファン・ノイマンや放浪の数学者として知られ、生涯に1500本近くの論文を書いたポール・エルデシュ、原水爆の開発に貢献したエドワード・テラー、ビタミンCを発見してノーベル医学生理学賞を受賞したアルバート・セント-ジョルジ、非協力ゲーム理論でノーベル経済学賞を受賞したジョン・ハサーニなど20人の取材と調査に基づく評伝が含まれている。

どうしてこのようなキラ星のような天才がわずか50年足らずの間にハンガリーから輩出されたのであろうか。著者はハンガリーのユダヤ人という人種的、地政学的な理由のほかに、ギムナジウム(高等学校)が極めて優れた才能発見、発達システムを持っていたことを明らかにしている。評者はとりわけ以下の2点が重要なポイントであると思う。第一は高校教師が生徒に対して最大の教育的配慮を払い学問そのものへの熱意を伝えていたということ。第二にとりわけハンガリーでは博士号をもつ高校教師が多数いて、彼らが学問への橋渡しの役割を担い、優れた高校生は一人前の研究者として扱っていたということである。

ノーベル化学賞を1994年に受賞したハンガリー人ジョージ・オラーはハンガリ

一の将来に望むこととして次のように述べている。「21世紀が近づいている。国の将来は若者の教育にどれほどのものを提供できるかにかかっている。教育は未来への最高の投資だ。非常に競争的な時代に突入しているからこそ、これが重要になっている。人は読むことから学ぶだけでなく、コンピュータを使って学ばなければならない。科学は国際的な事業で、一国だけでは発展させられるようなものではない。しかし、自然資源に恵まれていない国では、もっとも重要な資源が人間そのものなのだ」(p.257)。この言葉はほとんどそのまま日本にも当てはまるだろう。もちろん、大国の狭間で翻弄されながら生きてきたハンガリー人と島国で比較的のほほんと生きてきた日本人とでは人生観や現実に対する感性も違うだろう。日本人はその与えられた環境の中で新たな比較優位を見出し、そこに集中して教育のエネルギーを投入すべきではないだろうか。